

志度寺

志度寺は、「願いが叶う寺」を意味し、四国八十八箇所巡礼の86番目の霊場です。さぬき市に位置し、長い旅の終わりが近づいた巡礼者たちを絶え間なく迎え入れています。志度寺は、森林に覆われた広々とした境内と、多くのお堂や建造物を有しています。この寺は、恐ろしい守護神を象った一對の像に挟まれた、仁王門（守護王の門）から入ることができます。この像は、仏像彫刻の名手である運慶（1150–1223 年）が彫ったものと考えられていますが、彼の作品のなかには、現在では国宝に指定されているものもあります。仁王門自体は、1671 年に高松藩主が寄進したもので、彼はその年、志度寺の本堂も新築しています。この門と本堂は、重要文化財に指定されています。この寺のもうひとつの象徴は、真っ赤な 33 メートルの仏塔で、1975 年に増築されたものです。また、著名な造園家である重森三玲（1896–1975 年）が設計した枯山水庭園「無染庭」も見逃せません。

この寺の本尊は、11 の頭を持った慈悲の菩薩である十一面観音です。この仏を象った像は、平安時代（794–1185 年）に檜の一枚板から彫られたもので、1 年に 1 日だけ、7 月 16 日に公開されます。それと比べて、寺院にあるもうひとつの像、奪衣婆を見る機会はやや多いかもしれません。この像は、毎月 17 日に奪衣婆堂で展示されます。奪衣婆とは、日本の民間伝承に登場する人物で、冥土で死者の魂が三途の川を渡って死後の世界へと辿り着く際に待ち構えています。奪衣婆は三途の川を渡った者から服を略奪し、それらを木に吊るします。そして、服の状態を見て罪の重さを判断し、死者が冥土の王である閻魔大王の宮殿に通され裁きを受ける前に、様々な罰を与えます。志度寺のもうひとつのお堂では、十一面観音の形をした閻魔大王が祀られています。志度寺では、この 2 尊は同じ神の化身と考えられています。閻魔大王像もまた、毎月 17 日に見ることができます。